



歌詞の語原若干條

洋学文庫
文庫8
A 150
7



歌詞の語原若干條

特
118
200
(7)



歌詞の語原若干條

大槻文彦 槻文庫

枕詞といふものゝ、「廣津鳥鷄」、「真草刈ル荒野」、「真木柱太き」
 の如き、考へてして解せぬ、又、「柵葉の母」、「柵の木の彌縫々々」、
 の如き、はふつが、「つぎ」の音の通ふを、重ぬてつけたる事と、事と
 なく聞ゆるもあれど、其外、何をも解し得られぬもの多し、其各
 語の就きて、世々の學者の、其語原と、下の語子なる意義とを
 誤られたるもの、異説紛々たり、其誤られたる、理空屋詰の論
 完せられて、遂に卒強附會の陥られたる多し、余も、古語の語
 原といふものゝ、或て、やをらから、無造作に成れるものも、深き理
 空屋を存するものとの見解を持つ、枕詞も然り、唯、古語の原が

故、道義の解せられずありしなり。今、其解し得たりと思はる。
その若干を記さむ。先、草の衆説を、一々舉げず。
ひさかたの(久方) 天の枕詞、日刺す方の畧と解して事云
かるべし。(荒木田久老大人の説)

「さす」の「さ」を畧す。萬葉集、五の九丁、長歌、「少女等
が、佐那周板戸を」同十一の九丁、雲間より、秋渡る月の、
鳴す、美渡るの畧あるが如し。

日刺方と、宮の枕詞ある。内刺日と同じ心なり。此語は、現
日刺の約、宮は高けれを云ふといふ。古事記、下の三十七丁、日
代の宮と、朝日の日照る宮と、同意あり。

古事記中の五十二丁、比佐迦多能阿米(天)の香山

子准へ

日、月、雨の枕詞と云々。天を畧して用ふるなり。都の枕詞と云々。天
々云ふなり。

古今集、二春下、久方の(天の日の)光のどけき、春の日は、静心あり、

花の散るらむ。

萬葉集、十五の二十二丁、以佐可多乃(天の月、照りたり、

同、四の十八丁、久堅之、王都、草枕、旅行、君を、ソとか

待たむ。

枕詞を、其のつくき語を畧して用ふる。下の語を言ひて、
慣れて、それと言ふが、枕詞のみを解せられずあり、其畧法の

進みて大枕詞を直ち下の語として、飛鳥の明日香(地名)春日
の糟垣カスガキ日本の大和ヤマトありを、飛鳥トビ春日カスガ日本ヤマトと書くよ至は、是
れなり。

萬葉集集の二十九丁「飛鳥の明日香の里」同の三十丁「飛鳥の

明日香の河」古事記下の十八丁「遠飛鳥宮」

武烈ウチノ即位前紀「播磨比能箇須我ヒノノ過ぎ」萬葉集、

三の三十六丁「長歌ナガウタ春日カスガの山」

大宮の枕詞、百千足をとり百まで、

もしき

比しきの(百敷) 大宮の枕詞、百千足をとり百まで、

湍足盛大あり意、敷を宮柱太敷ミヤハしらまきまきミヤハしらをどの敷ミヤハしら地チ

敷き占めたまふ意あり、後世、屋敷地、道敷ミチノ川敷カハノ地チと云

ふも、是れあるべく、百敷大、百坪千坪萬坪と言はむが如く

ありし。この十八丁、秋津の野鳥、宮柱太敷まきまき、

雄略紀、毛々志紀能大宮人は、

↑大宮を畧して古今集十八雑下「山川の音子のみ聞く、

もしきの(大宮)を、身をはやから、見よ由らがる、續後

撰集十八雑下「百敷(の大宮)や、古き軒端の、忍しのび子こを

ほあまきりあら、昔むかしよりけり、

あらたまの(荒玉) 年ノ枕詞、^{アラクマ}璞の意、^{トク}礎とつくると云ふ
説、然るべし、磨くべきものなれむ^{あり}の^との音を、^{トク}年ノ子かけ
て用ゐたるあるべし。

萬葉集、三の五十一丁、長歌「荒玉の、年経るまで、同、十

一の六丁、^{アラクマ}璞の、年を果つれど、^{トク}「まへにかゝる、年月の來經の

月、かくる、年月の月、移り、^{トク}移りたるあり、^(來經)

古事記、中の五十三丁(景行)、「阿良多麻能、登斯(年)が岐在れ、

阿良多麻能、都紀(月)を岐^{トク}開(來經)行く、

萬葉集、十一の十六丁、^{トク}璞之、亦戸^{トク}竹垣、編目、後、妹^{トク}見え

る、吾^{トク}悲ひめや、^{トク}才戸、地名ありと云ふ、^{トク}從^{トク}後よりあり、

△^{トク}地の枕詞

後、春の枕詞とある、新年改まる意と解しかへたるあり、

忠見集「あらたまの、春も知らず、古里を、云々、

あらがねの(荒金) ^{アラクマ}鐵の鐵椎とつくると云ふ、^{トク}當り、^{トク}鐵ぶき

ものなれなる、それを、^{トク}地、かき用ゐるあり、

古今集、序、あらがねの^{トク}地、^{トク}云々、

菅家萬葉集、下「荒金の、土の下、^{トク}履しものを、今日の^{トク}占

手、^{トク}逢ふ女、^{トク}花、

ぬばたまの(烏玉) 夜の枕詞、ぬばたま、^{トク}寐間の轉、^{トク}寐る間の思、

たま、^{トク}たま、^{トク}時、^{トク}のたま、^{トク}眠る間の夜と、^{トク}か、

ぬばの^{トク}を、^{トク}暑、^{トク}萬葉集、二の三十三丁、長歌「^{トク}宿、^{トク}兄、^{トク}鳥、^{トク}(鶴)

一、^{トク}ぬば

あたま
ぬば
のたま

然^{シカ}出^ルから子^を、志^かを^か子^か、かへ^るて^をかへ^て（櫛）の例あり、ば
と^まと^通ぶる^ス、み^はよ^らは^子、殿^造せ^りも、三^間、四^間、ま^ま
が如^し。

萬葉集、二の二十八丁、鳥玉^ノ之^ノ夜^ノ渡^る月^の、
夢^の枕^詞とある、夜^を畧^{する}あり。

萬葉集、五の十丁、奴^婆多^麻能^用流^{（夜）}の伊^味（夢）
を、つぎに見え^る、同、四の三十八丁、夜^干玉^能、夢^子見^えつ、
月^の枕^詞とある、夜^を畧^す。

萬葉集、二十の五十七丁、奴^婆玉^乃、己^其以^{（今夜）}の都^久欲^{（月夜）}
か^をみ^たら^む、同、十七の三十五丁、奴^婆多^麻能^都大^可（月

子^向ひ^て、

黒^の枕^詞とある、夜^の暗^まと通^ぶる^{あり}。

古事記、上の四十丁、奴^婆多^麻能^黒き^御衣^を、雄^畧記、
十三年九月、畧^播施^磨能^甲斐^の黒^駒、

髪^の枕^詞とある、黒^髪の畧^{あり}。

萬葉集、四の二十八丁、野^干玉^之、黒^髪変^け、同、九の三十二
丁、長^歌、鳥^玉乃[、]髪^を乱^れて、

う^はた^まの^とふ^え、平^安朝^{以後}の轉^音あり、む^はた^まの^とえ、
又^其轉^{あり}。

古今集、十二、恋^二、と^せめ^て、恋^しき^時を、う^はた^まの^夜の^衣を

かへしてぞ^マ待^ルも、

和泉式部集四、「むは玉の、今宵むかりを、思ひつ、まゝとちままで
らむ、^{ササ}夢子を見えむ、

やまたつの 迎へ、枕詞

やまたつの(山多豆) 迎への枕詞、山多豆を、今云ふ接骨木の
事あり、枝葉相向ひて對生をれむ、むかへ^マか^マる、

古事記、下の二十三丁、「君が行き、けるがくるりぬ、夜^ヤ麻^マ多^タ豆^ヅの^ノ年^ニ
加^カ開^ヘを行^キむ、待^マつ子を待^マたじ、註、此云山多豆者、是^ミ今^イ造^ク木^ノ
者也、

萬葉集、六の二十五丁、「櫻花、咲きまむ時^{トキ}、山^{ヤマ}多^タ頭^ヅの、迎へ

參出む、君が来^キま^スむ、

「やまたつを、みやつさぎ」とも云ふ、みやつさ、今訛^シりて、接骨木と

いふあり、(以呂波字類抄、女貞、ニハツコギ)「やまたつを、たつの木」

あり、接骨草^{ササ}子^コ對して、山^{ヤマ}た^タつと云^ハひ、又「木^キた^タつ」の名もあり、

「たつ」の語原、詳^シる^ルを、詠^ミみ^ミ云^ハへ、^{ササ}幹^カぬ^ケぬ^ケて、^{ササ}段^{ダン}々^々を^ハな

せむ、^{ササ}斷^{ダン}續^{ツク}、^{ササ}意^イこ^コも^モあ^ハら^ハむ^ムか、みやつさぎの語原、老人得^{トク}ず、

新撰字鏡、五十一丁、「女貞、比女豆波木、又造^ミ木^キ」、本草和名、

上ノ五十二丁、「女貞、美也、都古岐一名、多都乃岐、接骨木、美也、

都古岐、康賴本草、上ノ五十一丁、「接骨木、美也、川^{カハ}己^ニ支^シ、ニハト

コ、以呂波字類抄、女貞、タツノキ、ニハツコギ、

みやつたぎ、たづのみき、接骨木、ひめつばき、今、女貞、さるべし、二木相似たれを混じたり、

あしびきの(足引) 山の枕詞、語原誤種々難多かれと、冠辭考の「生」繁木シノキの畧稱と云ふ當なり、上古の山々を、樹木自然シノキ繁かりしを、此故、枕詞とせしむ。

冠辭考の誤を敷衍せむ、

あ「おの」と通ずる、母を於母オモと阿母アモと云ひ、幼稚をを「あ」とまなし「あどるし」「あどけあし」と云ふ例あり、

「び」とみ」と通ずる、えみじ、えびき、(夷)おほくび「おんみ(稚)上二段活用を、生る繁木シノキを、(き)生る繁木シノキとも言ふべき

あしびき

例、萬葉集、十ノ二十四丁、「於布之毛竹等、此本山の云々」とある、生るシノキ茂木シノキ「あろのみあふた、下二段活用の「終」を、(き)を、播磨國屋土記、託多郡黒田里、表布山の條に、「云我可座カサ之時オケノトキ故曰表布山、」などの例あり、然して、其おふカサノムヲ畧スル例、新撰字鏡、十丁、「瘧カサ於布志カサ」とある、強固心方、二十五ノ十三丁、「瘧カサ瘧カサ」とあり、繁木シノキと云ふ例、古事記、上ノ十丁、「志藝山シヤツ津見神ツミノカミ」とあり、志藝シヤツ、繁木シノキ、繁木シノキ、繁木シノキ、志藝山シヤツ之ノ靈マタ、義キ、萬葉集、一ノ二十三丁、長歌、「青香山アヲカミ云々、春山と、之美ニさひ立てり、同九の三十二丁、今木の岬シノキ、茂立シノキも、孃待シノキの木の云々、同十の三十七

丁「秋々秋え、枝も思美三よ、花咲きにけり、繁々の約あり、
きて、しみとふも、繁ゆる意あり、

上代子、山を繁葉の樹木子就きて云へる例を、神代紀上の

九丁「使青山カサヤク変枯カサヤク」萬葉集、六ノ四ノ丁、長歌、百樹成る、

山を、木高し、成る、盛の省字を、繁と意あり、同、七の二十

八丁「青山の、葉茂き山、青垣山、青葉の山を多し、

古事記中の二十丁「兄恭」阿志比紀の陸山田を作り、

あしひきの「え、山と同義あるハ山、尾上などの枕詞に用る

れ、又、山を畧してと用ゐらる、

萬葉集、十九の十丁「足引の、ハ山ハツツの、雉キ」同卷、十一丁「足引

の、尾上の「櫻」同、三の四丁「足日本能山」石根山」同、ハカ

ニハ丁「足引の山」許乃間木間」同、十の六十三丁「足

檜木の山」山下風」

いさる魚取」海濱湖の枕詞、磯魚取魚取の轉あり、

草根集、長祿徹書記六、淺瀬行く、いさを取ると、夢

みま、河の踏鳥の、眠り立てるを、同十「種おろす、苗代水も、あさ

路鳥の、いさを取ると、たつ里の子、

萬葉集、鯨魚取魚取」を、字を當て、おれと、鯨

の、湖濱に居るべきあり、壹岐國風記、鯨伏鯨、俗、鯨

為伊佐山、律師萬葉集抄、三」とあれど、鯨を魚取

いさる

と云ひしかる知らぬと、枕詞を書けりて、借字あり。

元祿紀、十一年三月、異舎備等利海の濱若澤の、萬葉集、

二の二十四丁、鯨魚取、淡海の海、同、三の三十四丁、男魚取、

海路を出て、同、六の十五丁、長歌、鯨魚取、濱邊を清み、

たらちねの(足千根) 母の枕詞、萬葉集古義枕詞解、

たらちね、足^{タリ}の敬語あり、足らしの釋、足らし^{タリ}を、贅録、

〇、ぬ^タ根^ネを、尊稱ありと云へり、

「し」の「ち」と通じりて、あらし(荒屋)は、ち(疾屋)けし(けあ消)

は、ちしはち(放)の例の如し、

足^タり^リえ、満盛なる意、其敬語の「足^タり^リ」の名詞形が「足^タり^リ」

し^タり^リ、猶「取^タり^リ」の敬語あり、「取^タり^リ」が、「沸執^タり^リ」となり、「俗^タく

の敬語の「俗^タく」が、「御侍^タ」とあり、か如し、

十草記、中の二十三丁、「垂^タ根^ネ王」同卷、五十九丁、「建^タ心^タ山^タ垂^タ根^ネ」

(人名)見え、同書、〇、成務天皇を、「若^タ世^タ市^タ日子^タ天皇^タ」神功

皇后を、「息^タ長^タ帯^タ比賣^タ命^タ」と申す、垂^タ根^ネ足^タ、帯^タは足^タらしの

借字、~~後~~後者の「足^タらし」前者の根^タ合^タして、「足^タらし根^タ」

が「たらちね」とあり、

根の尊稱ありて、孝靈、孝元、開化、清寧、元明、諸天皇

の御名を日本根^タ子^タと申^タ、日本^タを^タ知^タしめ^タる^タ故^タの御名^タを^タ孝^タ徳^タ

紀大化二年の詔、日本^タ倭^タ根^タ子^タ天皇^タ、天武紀十二年の

たこもん

詔子、日本根子天皇とあるを知らずべし。

「たらちねの」を、母の枕詞としたる出典、堪奉る子及を、

「たらちねの」を、たらちねのの轉する、ひねもを、ひめを(終日)

相通ずるか如し、此枕詞を、多くを、母を畏るして、直ち子母と云

ふ名詞の如く用ゐらる。

後撰集、十七、雜、三、始めを、髪おろし侍りける時、云々、僧正遍

照「たらちめ(の母)を、かれとせしむ、うばたまの、我が黒髪

を、撫でずやあ、りけむ、

千載集、九、哀傷、顯昭法師「垂乳め(の母)や、とまりて我

を、惜まらし、代ふる子、代る、命有りせむ、

「たらちねの」を、親の枕詞とする、父母よわたる、意とする、

菅家萬葉集、下、恋、足千種タケチヌの、親に、つらしか、かむむかり、

思ひ子、迷ふ、せよと、めたふ、

拾玉集(慈鎮)、「たらちねよ、又たらちめも、失せはて、

頼む、蔭なき、歎きを、ぞとら、是れを、父と母と、別ちて

云へる子か、謂えれなきと、あるべし、

「たらちね」といふ語生じて、父の養を、たらちめ「のめ」を、女と

見て、言ひ成す語あるべし、

母貝之集、十、雜、世の中子、誰れか、名真き、たらちねと、我

とが中●を、人々知らあむ、

下学集人倚門、重乳根、父母終名也。或云重乳夫、母云重乳妻、林漢節曰、重乳根、父母。

たまはりの(玉梅) 道の枕詞、玉、美稱、梅、上古出征、必用、武
器、(後、儀仗、用、木、製、衣、故、木、牛、の、合、字、用、用、
器、) 舒明紀、五丁、四、嚴、三、車、將、の、武、威、示、兵、器、云、平、
り、玉、梅、と、美、稱、意、近、し、又、道、と、常、道、路、の、事、梅、梅、征、征、伐、
子、出、行、梅、梅、持、持、出、出、征、征、意、意、玉、玉、梅、梅、の、の、道、道、と、と、後、後、
没、以、道、路、の、枕、詞、云、云、玉、玉、梅、梅、の、の、道、道、と、と、後、後、
玉、持、持、之、之、天、天、地、地、闢、闢、の、の、時、時、諸、諸、冊、冊、の、の、二、二、尊、尊、瓊、瓊、玉、玉、以、以、天、天、滄、滄、溟、溟、
探、神、神、化、化、紅、紅、の、の、下、下、大、大、國、國、主、主、神、神、以、以、平、平、國、國、時、時、所、所、杖、杖、之、之、廣、廣、
受、授、授、二、二、神、神、曰、曰、吾、吾、以、以、此、此、玉、玉、卒、卒、有、有、治、治、功、功、天、天、孫、孫、若、若、用、用、此、此、玉、玉、治、治、國、國、
者、必、必、高、高、年、年、矣、矣、上、上、有、有、猿、猿、田、田、彦、彦、神、神、の、の、天、天、孫、孫、臨、臨、降、降、の、の、先、先、驅、驅、の、の、戈、戈、持、持

梅

武甕槌
神經津主
神

たまはりの(玉梅) 道の枕詞、玉、美稱、梅、上古出征、必用、武
器、(後、儀仗、用、木、製、衣、故、木、牛、の、合、字、用、用、
器、) 舒明紀、五丁、四、嚴、三、車、將、の、武、威、示、兵、器、云、平、
り、玉、梅、と、美、稱、意、近、し、又、道、と、常、道、路、の、事、梅、梅、征、征、伐、
子、出、行、梅、梅、持、持、出、出、征、征、意、意、玉、玉、梅、梅、の、の、道、道、と、と、後、後、
没、以、道、路、の、枕、詞、云、云、玉、玉、梅、梅、の、の、道、道、と、と、後、後、
玉、持、持、之、之、天、天、地、地、闢、闢、の、の、時、時、諸、諸、冊、冊、の、の、二、二、尊、尊、瓊、瓊、玉、玉、以、以、天、天、滄、滄、溟、溟、
探、神、神、化、化、紅、紅、の、の、下、下、大、大、國、國、主、主、神、神、以、以、平、平、國、國、時、時、所、所、杖、杖、之、之、廣、廣、
受、授、授、二、二、神、神、曰、曰、吾、吾、以、以、此、此、玉、玉、卒、卒、有、有、治、治、功、功、天、天、孫、孫、若、若、用、用、此、此、玉、玉、治、治、國、國、
者、必、必、高、高、年、年、矣、矣、上、上、有、有、猿、猿、田、田、彦、彦、神、神、の、の、天、天、孫、孫、臨、臨、降、降、の、の、先、先、驅、驅、の、の、戈、戈、持、持

古事記中の四十九丁倭建命の東征の時天皇賜給
以々羅木之八日尋牙と見也後出征の將玉等刀賜与云々
其遺り故たまほ賜与と云々神功
皇后の杖かせり新羅王の門子樹を斬り霊異記
上の第一子小部極輕が雄略天皇の勅受け雷捕へ
能て出行の時警赤幡栴乘馬と云ふ是也
道と討伐子出行古事記上の五十四丁於道者
僕子建御雷神可遣同書中(孝元)針間為道口
以言向和吉備國雄略紀二十三年八月征新羅將軍

吉備臣屋代が吉備國率蝦夷の叛討滅時
彌致子戰屋代の子萬葉集六聖武天皇の第
度使の出發せし時賜也大御歌丈夫の行路云道
思行丈夫の道是也
萬葉集一の三十九丁長歌玉栴乃道行
丁長歌多末保許能美知子出立也
同上の三十二丁遠事君是也玉栴乃(道)里人比自
吾恋也

シ

ツク

枕詞の數多し、書き盡す（枕詞の語原を意を）、輕々と解（枕詞の語原を意を）、此等筆（枕詞の語原を意を）、

枕詞の語原を意を、輕々と解、此等筆、

對懸、業（枕詞の語原を意を）、多し、次、嶺、經、山、背、角、障、經、石、味、澤、相、目、奈

麻、余、美、乃、甲、波、又、其、他、釋、得、疏、也、少、先、車、の、説、々

枕詞、首肯、

玉梓の使、解、得、使、の、使、梓、

持、花、の、枝、添、へ、花、中、ト、カ、リ、シ、花、長、風、情、使、者、

梓、の、木、の、枝、持、何、の、意、成、

橘、守、部、大、人、の、説、子、た、ま、の、乱、舞、の、思、轉、使、急、

橘、守、部、大、人、の、説、子、た、ま、の、乱、舞、の、思、轉、使、急、

鳥羽評言へ云へば、云々古事記下の二十二丁、輕太子の御歌、
天飛^{アスカ}阿摩^{アモ}吃^ク年^{ネン}輕^{カル}嫌^{クハレ}女^メ、(輕^{カル}雁^{カガ}次^ジの御歌、阿摩^{アモ}
登^{ノボ}夫^{ツブ}鳥^{トリ}使^シ雁^{カガ}萬^{マン}葉^{エフ}集^{ツミ}十五^{イハ}、天飛^{アスカ}雁^{カガ}使^シ得^{ユク}れ^ト奈^ナ
良^{ヨシ}の都^ツ言^{コト}告^{ツク}册^{セキ}準^ス、早^{ハヤ}翔^{タビ}の思^{オモ}、思^{オモ}ル^ト、
多^{オホシ}年^シと云^{イハ}、他^{イタ}子^コ見^ミ、た^タま^マら^ラさ、如何^{イカニ}

又從來、枕詞と稱し、中、枕詞、平語として、意味成
せり多し。

高光^{タカミツ}日^ヒ、葦^{アシ}が散^チる難^ナ波^ハ、刈^キ鷹^{トウ}の(如^カ)乱^{マシ}る、山川^{サンケン}の(如^カ)
激^{タガ}の、闇^{ヤミ}の夜^ヨの(如^カ)行^{ユク}先^マ知^チら^ズ、朝^{アサ}霜^{シロキ}の(如^カ)消^{ユク}や^サ命^{ノチ}、
の(と云^{イハ})辞^ハの(如^カ)、言^{コト}多^{オホシ}、歌^{ウタ}文^{ブキ}多^{オホシ}、古^コ等^{トウ}の類^{ルイ}、一^{ヒト}、枕

詞^{ウタ}之^ノ立^タつ^ル煩^{ワザ}、煩^{ワザ}、極^{タビ}、平^{ヘイ}語^ゴと見^ミ、

たまちはふ(魂章) 近代の歌文に、此語を神の枕詞（神の魂が）と誤り、

萬葉集、十七の二十八丁、寄神陳思、

千早振、神の保形、命思、誰（誰か）長（長）欲（欲）形、

靈（タマ）治（チ）波（ハ）布（フ）、神の吾（我）思（思）、打（ウツ）棄（シ）命（イ）の惜（シ）、

右の字二の歌、人の魂、我（我）命（命）保（保）、我（我）命（命）保（保）、

神（カミ）吾（我）思（思）、吾（我）命（命）惜（シ）、思（思）、思（思）、思（思）、

現實（現実）吾（我）思（思）、吾（我）命（命）惜（シ）、思（思）、思（思）、思（思）、

本（本）書（書）、此語、萬葉集の此歌一處、他（他）何（何）書（書）、現（現）居（居）、

枕詞、此萬葉集の歌の如き意味、場合

たまちはふ

等根自家米ヲモ同一の八丁山越ノ金時ノ時自ノ身ノ寐ノ夜ノ

時ノじくノ常ノじくノと通ノ此ノ時ノと云ノふノ永久ノカノ如ノ物ノ事ノの續ノ
非時ノ不時ノ臨時ノ字ノ當ノて書ノ以ノ
續ノ思ノ思ノ然ノ然ノ

萬葉集ノ十ノ十二ノ「白雲ノの常ノ敷ノ冬ノ過ノ」

同ノ十九ノの四ノ十六ノ丁ノ「立ノ別ノ君ノ御ノ行ノ磯ノ城ノ島ノの人ノ我ノ自ノ久ノ祝ノ
待ノ外ノ磯ノ城ノ島ノ大和ノ國ノの事ノ此ノ歌ノ但ノ馬ノ國ノへ行ノ人ノ

誠ノせしむノ事ノ大和ノの人ノ君ノ我ノ身ノの事ノの如ノ祝ノ候ノ待ノ外ノ
と云ノふノ事ノ

續日本紀ノ二十二ノ天平寶字三年六月の詔ノ家自ノ久ノ於母ノ重ノ

自岐人ノトモアリ

麿ノ物ノ鴉ノ物ノ用ノ終止形ノ連體形ノ用ノ名詞ノ接ノ

格ノ格ノ同ノじノ事ノ於夜自枕ノ愛ノ妻ノ憂ノしノ妝ノ齊ノ並ノ

嬉ノしノ涙ノ但ノ其ノ濁ノ同ノじノ於夜ノ忌ノ睦ノじノ

女ノさまノじノ外ノ單獨ノ終止形ノ例ノ見ノ又ノじノくノじノ

於夜自ノ同ノじノ同意ノの語ノおやノ親ノ似ノ意ノ也ノかノ

あるノじノ已ノの轉ノ也ノかノ

天智紀十年正月「福ノ己ノ枝ノ成ノ玉ノ貫ノ以ノ時ノ於野ノ

児緒ニ貫ク、萬葉集、中二十丁、於夜目枕、吾枕有夢

十九ノ十丁、長歌、大君の敷、大國、都、此處(越中)於

夜自(終止形)と、思、云々、

右の如く、くみれど「じもの」と、と「名詞結合」し「副詞の如く用」

の如く、らしく「めきて」の「意」を「成」

左の如く、用「法」を「枕詞」と、説「現」下「の」副詞「修飾」

凡副詞類

萬葉集、一の二十二丁、長歌、鴨自物水、浮居、鴨の如く、浮居、同

同、二の三十五丁、鹿自物、伊弉伏、同、五の二十八丁、犬自物、能道

同、六の三十一丁、馬自物、縷取、

祈年祭祝詞、宇(鷄)事、項根、衝、技、

萬葉集、九の三十丁、長歌、鹿見自物、吾が、獨子の、是、鹿見

の如き、

す、がね（佐瑳が山領）をかに（蜘蛛） 久茶紀、八年二月、衣通郎
姫の獨り居て、天皇を正ひ奉りたまふ御歌子、

吾が夫子が来べき夜あり、佐瑳鐵泥の一區茂の於虚奈比、
今夜著しむ、

とある、佐瑳が山領の雲のた、ままひを見たまひて、君の来まを、
象としたまひしなり、

私記、佐瑳鐵泥を「山名也、一區茂能於虚奈比」と云之於
又云也、（積威言別）とあり、佐瑳鐵泥、何處の山ありか、詳
らず、若し、細小山領の意にして、小山の草子もあはまか、

雲の來の動靜子因りて、物事の象とある、と多し、

神代紀^{上巻}大蛇の屋より、業取雲の剣の出でし時、大蛇所居之
上、常有雲氣来、こゝろ見え、古事記中の十二丁に、當^{タカ}藝志^シ美々
命の、三、身を殺さむとしたまひし時、伊^イ浪^{ナミ}氣^キ余^ヨ理^リ比^ヒ賣^メの、直^ナへ
て、御子のたちを不^フしたまはる御歌子、佐^サ幸^キ川^{カハ}よ、雲立ちわたり、敵^{トク}
傍^{ナリ}山、木の葉さよぎぬ、風吹かむとを、同巻、五十五丁に、倭建命
伊勢子と二病みたまひ、大和を思ひますて、我^{ワケ}家^カの方^ハよ、雲居立
ちくま、(我が家の方へ、雲立ち行くまゝ)と、羨^{ウラヤシ}みたまひしたとあり、
後^{ノチ}るえ、慶雲見ええれて、大赦ありし幸^キまを、屢^{シバシバ}あり、衣通身姫^{ヒメ}
御歌子、佐^サ幸^キが山^{ヤマ}領^{ノリ}の雲氣来^{クモキキ}子^コ因^ユりて、ト^トしたまひしあり、

古事記

さかかにの、人もの、あすか、おぼてしらしと、したるを、久^ク恭^{キョウ}紀^キ子^コ、源^{ゲン}と
ありを、^にと讀^{ヨミ}みたかたさうり、たれ子^コより、さかかにを、細^{ホソ}小^コ解^カ出^デ
の意^イ子^コ取^リ、人^{ヒト}を蜘蛛と見^ミちやう子^コありき、(蜘蛛を、解^{トク}出^デ似^ニ
てちひさきものと見たるまゝ)蜘蛛の舞^{マユ}動^{ウツ}を見^ミて、人の来^キ不^フ口^クを
古^コ今^{イマ}集^{シユ}と云^{イハ}ふたと、上^{ウヘ}代^ト子^コあるまじき事^{コト}あり、
さて、細^{ホソ}小^コ籠^{カゴ}の^にしたるより、蜘蛛の枕詞^{マクシ}のやう^ニ見^ミて、又^{マタ}、さかかにを、
直^ナち子^コ、蜘蛛の事^{コト}と云^{イハ}ふやう^ニあり、^{山^{ヤマ}も、蜘蛛^{クモ}と兼^{カミ}有^{アリ}、變^カ轉^{テン}あり、}
古今集、十五、恋、五、<sup>今^{イマ}したと、わびしものを、さかかにの、衣^{ウロモ}子^コかり、我^{ワケ}
をたのむら、今^{イマ}は、はや、来^キまじと、^{彼^カびて居^イたるものを、蜘蛛^{クモ}が衣^{ウロモ}子^コ}
かりたるえ、又^{マタ}頼^{タノ}みあやう^ニ思^{オモ}へる、との意^イあり、</sup>

蜘蛛

此歌、詩經、東山トシノカガヒ、蟪蛄在戶、陸機云、謂之喜母、此虫
來著人衣、當有親客至、有喜トシノカガヒ、トシノカガヒ、あるに因りて詠めりし
のか、詩經、當時の教科書ありき、

後撰集九、恋一、絶えはる、物とを見つ、さ、かにの糸をた
のめ、心細さよ、

さ、かね、さ、かに、~~蟪蛄~~、誤讀、起り、されど、

古くよりのとをたれを、今と用ふるも、想を、一まか、

下學集(文安)「蜘蛛、日本俗云、竹條解虫一也、」

かはら(河蝦)

河蝦カハラの古名(錦襖子)蛙カハの類を、清流まの

み棲み、秋アキ鳴くものあり、語原、河之蛙カハの下畧カハ、カハ、萬葉

集カハ、カハラの字を音てたり、田子棲む蛙と別ちて云ふ

名と思ふ、下畧カハ、秋アキ之虫カハ(蜻蛉)をおき、と云ひ、(大

同類聚方、五の五十三下、阿支アキ豆カハ牛之)家カハ之子カハ(奴)を、やつ

と云例あり、(竹取物語、大盗人のやつが云々)之を濁る、カハ之

靈カハ(雷)を、佛足石歌カハ、伊加豆カハ知カハとあり、

集韻「蝦、蝦カハラ也、カハラ海、蝦カハラ其カハラ蝦カハラ也、」

萬葉集、七の七下、河カハラ豆カハラ鳴く、清き河原を、今日見れを、同、

十の四十八下、夕去らば、河カハラ蝦カハラ鳴くあり、三知河の、清き瀬の音

を聞かしくしよしま、同巻子、詠蝦の歌とて五首あり、

河^{カハ}蝦^カも、秋^{アキ}の鳴^ナき、蛙^{カエル}も、春^{ハル}の末^{スエ}夏^{ナツ}の初^{ハジメ}も鳴^ナく、萬葉集^{マンヤクシウ}十^{ジュウ}の四^シ十^{シウ}

一^{イチ}丁^{テイ}、神^{カミ}名^ナ火^ヒの山^{ヤマ}下^ノ動^{ユキ}み、行^{ユク}く水^{ミヅ}子^コ、川^{カハ}津^ツ鳴^ナくま^マり、秋^{アキ}と^トは^ハむと^ト也^ヤ、

古今集^{コキンシウ}二^ニ序^{シヨ}、花^{ハナ}子^コ鳴^ナく鶯^ウ、水^{ミヅ}子^コ住^ヰむ^ムか^カは^ハら^ラ、(漢^{カン}又^{マタ}二^ニ序^{シヨ}、春^{ハル}野^ノ鳥^ト

之^ノ囀^{セウ}花^{ハナ}中^ノ、秋^{アキ}蟬^{セン}之^ノ吟^{イン}樹^{ジュ}上^ノ)と^ト、^あ春^{ハル}と^ト秋^{アキ}と^トを^ヲむ^ムか^カへ^ヘて^テ云^ク

へ^ヘる^ル、物^{モノ}類^{レイ}稱^{セイ}呼^コ、(安^{アン}永^{エイ})二^ニ動^{ドウ}物^{モノ}、河^{カハ}鹿^{シカ}、其^シ聲^{セイ}耳^{ミミ}鹿^{シカ}の^ノ鳴^ナく^ク子^コ似^ニ

たり、云^ク々、肥^ヒ州^{シュウ}と^トを、水^{ミヅ}を^ヲか^カは^ハら^ラと^ト呼^コぶ、常^{トコ}の^ノ蛙^{カエル}を^ヲか^カへ^ヘる^ルと^ト呼^コぶ也^ヤ、

かへる(蛙) 田^タ溝^{コウ}の^ノ濁^{ダク}水^{スイ}中^ノ、棲^シむ、詔^{ミコトノコト}原^{ハラ}を、鳴^ナ聲^{セイ}耳^{ミミ}を^ヲ名^ナと^トせ^セしか、

萬^{マン}葉^{ヤク}集^{シウ}、八^{ハチ}五^ゴ十^{シウ}丁^{テイ}、我^{ワガ}が^ガ宿^{ヤク}、^あ萬^{マン}葉^{ヤク}づ^ツ、蝦^{カエル}手^テ見^ミる^ル毎^ヘ子^コ、同^{ドウ}、十^{シウ}四^シの^ノ二^ニ十^{シウ}

五^ゴ丁^{テイ}、子^コ持^チ山^{サン}、若^{ワカ}加^カ流^{リュウ}底^{テイ}の^ノ、黄^{ワウ}変^{ヘン}づ^ツま^マ、是^{コト}れ^レ也^ヤ、後^{ノチ}、畧^{リョク}して^シか^カへ

で(極)と云ふ樹の名あり、其葉の形の、蝦^{カエル}に似たれど、名とせしあり、

か^カは^ハら^ラと^トか^カへ^ヘる^ルと^トえ、別^{ワケ}物^{モノ}なりしが、平^{ヘイ}安^{アン}朝^{チウ}子^シを^ヲ至^シり^リて^テ、混^{マシ}じ^ジて^テか^カへ^ヘる^ルを^ヲか^カは^ハら^ラ

とい^イふ^フう^ウなり、清^{セイ}流^{リュウ}子^シ棲^シむ^ムか^カは^ハら^ラの^ノ名^ナを、忘^{ワシ}れ^レたり^リと^ト思^{オモ}は^ハし^シ、新^{シン}

撰^{セン}字^ジ鏡^{キョウ}に^ニ、本^{ホン}草^{ソウ}和^ワ名^ナに^ニ、和^ワ名^ナ抄^{ショウ}に^ニ見^ミえ^エず、後^{ノチ}ま^マに^ニ井^イの^ノ内^{ノウ}の^ノ蛙^{カエル}

蛙^{カエル}合^カ集^{シウ}ま^マに^ニい^イひ、清^{セイ}流^{リュウ}子^シ棲^シむ^ムもの^ノ子^コを、別^{ワケ}か^カじ^ジか^カの^ノ名^ナを^ヲ生^ナじ^ジたり、

伊^イ勢^{セイ}物^{モノ}語^ゴ、夜^ヨ毎^ヘ子^コ、か^カは^ハら^ラの^ノあ^アまた^マ、鳴^ナく^ク田^タ子^シを、水^{ミヅ}子^コを^ヲま^マさ^サれ、雨^{アメ}を

降^フら^ラせ^セど、

中^{チュウ}務^ボ集^{シウ}、か^カへ^ヘる^ルの^ノ乾^{カハ}れ^レた^タを、人^{ヒト}の^ノお^オお^オせ^セて、か^カれ^レけ^ケん^ンか^カは^ハら^ラの^ノ聲^{セイ}を、春^{ハル}立ち^チえ^エ、な^ナど^ドか^カ鳴^ナか^カぬ^ヌと^ト思^{オモ}ひ^ヒけ^ケる^ルか^カを、

其初相混じて歌を詠むやうし理由を萬葉集八の十七
丁より河津鳴く甘南備川よ影見え今や咲くらむ山吹の花此
がほろまると枕詞の如く用ゐるものあるを山吹と詠みあはせたる
やうに聞ゆ故に此歌をより春のものとして混じらるべしと云ふ
古今集二春下「がほろ鳴く井手の山吹散りけり夜の盛りさ途
たましものを」是れを枕詞のやうに用ゐたり

拾遺集一春「澤水よがほろ鳴くを山吹のうつろふ影や底
を見ゆらむ」

古今六帖貫之「流れ来りがほろ鳴くを足母の山吹の花にはふべらる
り」

花がら(螺言脚鹿) 奈良朝以前より螺言脚を「花がら」と云ひ

平安朝の頃鹿の異名を「花がら」と云ひき然るを鹿と云
ふを螺言脚あるを誤りて歌子詠めるありと云ふ誤れ非ざるべし
「花がら」と云ふは何れも腰の言脚れ細きもの子云ふ詠る
るが如し萬葉集九の十七丁より「腰細の瀬輕少女の其姿の
端正しさよ云々」あり螺言脚も少女も鹿も腰細きまが
故に云ふなり平安朝の頃子云ふを螺言脚を「花がら」と云
ふたと云亡びて専ら「さそり」と呼びしが如しされを歌子詠める
「花がら」も鹿なり

萬葉集あり「瀬輕少女は腰の言脚るる少女の意なり終

止形を連體形に用ゐたるも、同集十三ノ三十丁、長歌五、投
ぎり箭前ヤサの遠ざかり居て、同卷、三十四丁、君が偏し、投箭前ヤサ
しおもはぬ、泊つ瀬、出つ水（泉）などもあり、

同集十六ノ八丁、少女が絹の帯を、為スガレ輕の如き、腰細、取
飾ウケらひ、云々、とあるも、螺言脚ありべし、

雄略紀、六年三月、螺言脚、此云、須我屋、

本草和名、下の二十三丁、「螺言脚一名細腰、佐曾利、和名抄

同じ、平安朝の頃、螺言脚を、（名を）見えぬやうなり、

平安朝の頃より鎌倉時代にかけて、鹿（鹿）の異名を、（鹿）と（鹿）

古今集ハ、離別、（鹿）鳴く、秋の萩原、朝立ちて、旅行人

を、いつか待たむ、

堀河百首、（鹿）臥す、野中の草や、深からむ、行きかふ人の、
ゆきの見えぬえ、

月詣集（壽永）、「夕まがれ、（鹿）鳴く野の屋の音、事ごと
もあ、物ぞかたしき、

拾玉集（鎌倉時代）、「奥山（鹿）、かき、（鹿）ありあむ、後えさむ、

（鹿）が、（鹿）や、友とあむべき、堀河百首以下あるも、古今集の歌、い

ふ、（鹿）子因りて詠め、あむ、當時、（鹿）子、（鹿）と、いし、（鹿）を、あらむ

べし、

あさやは(朝顔)此語、~~種~~数種の植物の名、~~見~~後、~~後~~従来、
紛多の誤、~~誤~~此、解決、~~左~~左の如し、

先づあさやはと云、~~朝~~朝の容花の意、~~か~~かは、~~波~~波、~~成~~成形の義、~~か~~かは
はふと云、~~美~~美、~~花~~花、~~美~~美貌、~~人~~人、~~か~~かたち人と云、~~如~~如し、

伊仁紀、三十四年三月、~~次~~次女形、~~雲~~雲異記、上、第二十、次女、~~カ~~カホ、

萬葉集、八の五十二、長歌、~~高~~高圓の、~~山~~山、~~野~~野、~~打~~打行、~~遊~~遊、~~止~~止、

と花の、~~白~~白、~~反~~反歌、~~高~~高圓の、~~野~~野邊の、~~容~~容花、~~面~~面影、~~見~~見、

妹、~~忘~~忘れ、~~同~~同、~~十~~十、~~四~~四、~~三~~三、~~五~~五、~~下~~下、~~見~~見、~~可~~可保、~~波~~波、

奈、~~咲~~咲、~~出~~出、~~能~~能、~~思~~思、

空穂物語、初秋、~~仲~~仲忠の事、~~此~~此頃、~~か~~かたち、~~成~~成、~~り~~り、

あさ

三

オケル草葉モ色如リク 野生草花知次極モ然リ

中務集題詞「低まきさやうの根引来云々」西路御筆

淡茅が原の花 秋ヲ知ル

木槿の異名 灌木 字音 漢中種渡来の

朝花咲 單瓣 重瓣 花の色 白 淡紫 紫

碧深紅 殊ニ美シ 桔梗の名奪へ

和名抄二古三十三「葦 文字集畧云朝生夕落者也」説文「葦

木莖朝華暮落者」類聚名義集「槿 莖アサガハ」康

頼本草七五十二「木槿ムクゲ」

和漢朗詠集「秋槿」槿花一日自為世栄」あさかほの名

十思以久野花 此歌拾遺集二十長徳の部

世に次項の高牛牛子の詠 混れ

夫木抄十二槿花 建長八年百首歌合 あさかほの名

下學集「槿花云々」毛詩傳訓 呼苕苕曰朝顔云々

日本俗以為與槿莖共 蓋以傳訓共

夏・僧 極美 蘆花 送あさかほの名

古今集十物の名に「打筋けよ」(濃し) 花の色見置

行 今

く白露の澤（むらぎらき）美鹿（あまか）知（ち）
本草和名上の四十七丁「章牛子、阿佐加保、和名抄同じ」

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

かきつばた

かきつばた（杜若） 語原種々の説（諸説）皆非（皆非）此花（此花）採（採）衣（衣）

帛（帛）染（染）語原（語原）搔（搔）付（付）花（花）畧（畧）轉（轉）搔（搔）付（付）後（後）深（深）付（付）後（後）紺（紺）染（染）者（者）紺（紺）搔（搔）と云（と云）是（是）也（也）

常陸（國）金土記久慈郡河内里「所有土色如青紺、用畫

麩之俗云阿乎尔或加支川尔（阿乎尔）搔（搔）付（付）土（土）青土（青土）搔（搔）付（付）土（土）也

萬葉集七の三十三丁「真鳥住（真鳥住）肥乎杜（肥乎杜）の菅（菅）の實（實）悉（悉）衣（衣）書（書）付（付）

外（外）搔（搔）付（付）子（子）也（也）

はたのはと通（はたのはと通）はをきききはたきき（花薄）いたき（いたき）いたた

き（頂）へたりへたり（以陽）の例の如し

萬葉集七の三十五丁「住吉の淺澤小野の垣津（垣津）襦（襦）衣（衣）摺（摺）折（折）着（着）

古ハモ

此日知 （和名） 同、十七の十六丁「加吉都播多衣摺」（和名） 丈夫の競狩
積月 （和名） 来 （和名）

本草和名、上三十二丁、藪草、馬甘闇、加岐都波太（和名抄同
じ）（和名） 國語の意、古今の変 （和名） 知 （和名） 今 （和名） 云 （和名） かま （和名） げ （和名） た （和名） 眼

當 （和名） 類聚名義集、杜若、カキタ、十見 （和名） 今 （和名） 通用
字 （和名） 杜若、やみやう、文人、燕子花、用 （和名） 漳州府

志、燕子花、昔曼草の名、上 （和名） 未 （和名） 深 （和名） 以 （和名） 六 （和名） 九 （和名） 狩

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

冬ぐ（會供） 菜の名、語原、種々の説あり、多く （和名） 意 （和名） 子 （和名） 有

感 迷（り）袖中抄、十六子、女 （和名） 妻 （和名） ありと云ひ、芥 （和名） ありと云ひ、博考ある萬葉
集古義の品物解にも、不可解なる説を載せり、

此語を、會 （和名） 供 （和名） の字音なり、正月七日の節會の供、昂 （和名） ち （和名） 第 （和名） 供 （和名） と同
義 （和名） 七 （和名） 種 （和名） の若菜を云ふ、若菜を、春初 （和名） 子 （和名） 明 （和名） 芽 （和名） を

蔬菜の総名を云ふ、芥 （和名） も固より其内のもあり、子 （和名） の日 （和名） 子 （和名） 小 （和名） 松 （和名） を引く
といふ、松葉の若芽を、若菜として食ふが為なり、

萬葉集、十七丁「君がため、山田の澤に、惠 （和名） 具 （和名） 摘 （和名） むと、雪消の水、菅 （和名） の
裾 （和名） 濡 （和名） れぬ、同、十一の三十九丁「足引の、山澤 （和名） 回 （和名） 具 （和名） を、摘 （和名） み （和名） 子 （和名） 行 （和名） かむ、日 （和名） だ （和名） とも

會 （和名） 大 （和名） 母 （和名） 責 （和名） む （和名） とも、

詞花集一、春、曾根好忠、「雪消えぬ、忍ぐの若菜も、摘むべき
よ、春を人晴れぬ、深山邊の里、」

夫木坊一、若菜、俊頼、睡^{ムツキ}月の七日、仲實朝臣のもとへ、七種菜
をつかえとて、「わかみ川、むつきはゆる、忍ぐの末を、摘みしあへ
ても、そののみためぞ、返^{マゼ}菜、「心ざし、深きみ^ミ谷、摘みためて、
竹^{タケ}瓜^{ウリ}もありて、洗ふ根芥^{ネカイ}が、」

新撰六帖、七種の、数あるゆゑ、春の池も、忍ぐの若菜も、摘み
を發さじ、

菅家文章、六上陽子日野遊、云々、「倚松樹、以摩腰、習風霜
之難犯、和^ワ菜^{サイ}美^ミ而啜^シ口、期^キ菜^{サイ}味^ミ之克調、」

曾丹集、「宇波女塞が、朝菜も刻む、松の葉も、山の雪も、埋
しぬぬらむ、」

本草綱目、三十四、「松葉、細切煮汁食、輕身益氣、令人不老、」

萬葉集十一ノ十三丁、真澄鏡、手子取持ちて、朝々見れど君を、
飽くともまじし、同、十四、二十三丁、旦々、筑紫の方を、出で見つ、同、二十の
四十二丁、阿佐奈佐奈、上る天鵝、み、ありてしが、

遊仙空屋、夜々、空知心失眠、朝々、無復投膠漆、
又名詞として、朝菜夕菜の義、花中、朝夕の食饌の蔬菜あり、

萬葉集六の二十三丁、イサ見等、香椎の瀧、白妙の袖、濡れて、朝菜
摘みむ、海藻を云るを、同、十四の十七丁、此川、安佐奈洗之見、

催馬樂我門、我が門に、上裳の裾濡れ、下裳の裾ぬれ、安左名摘
み、由不名摘み、曾丹集、御園生の、薙の甘きも、立ちまけり、今朝
のあさかみ、何を摘まうし、

してたをさ、してのたをさ、(四手田長) 時鳥の異名、催馬樂子、
之天多字左とせられたて、清音あり、

催馬樂妹之門、妹が門や、兄汝が門、行き過ぎかかて、我が
行かど、肘笠の雨もや降らむ、之天多字左、雨宿り、笠立宿り、
宿りてまからむ、之天多字左、雨を故由として立寄らむ、雨降ら
せよ、時鳥よの意あり、

此語の語原、従来の諸説、紛々擾々たり、然れども、悉皆空想
あり、ほととぎす」と云ふが、啼聲を名とせしが、如く、してたをさ」と、
啼聲あるを名としたるあり、

ほととぎす、が、啼聲を、す、え、う、ひ、花、き、す、か、ら、す、め、を、を、花、を

ど、鳥トリの一種の接尾語ツキ「してたをさ」の「さ」とす」と通じ、
啼ナリ鳥トリ「してたうを」と聞くべし、まをす、まうを（申）の例を
り、

萬葉集、十八十七丁「曉トキ、若カ告ツり鳴ナリくある、鳥トリ云ク、やがらし
く、おしほゆるかま、自ら己ミが名ナを呼ヨび啼ナリく意イあり、

江談抄、三雜事、鳥トリ云ク、樹ツ蔭カゲ造ツ巢ネ生ナ字ジ、漸シ生シ長ナ之ノ由ユ云ク、
ホトギスト鳴ナリ去ク、

平安朝（初）の人ヒト●て、呼ヨ聲コエ鳥トリを、してたうを、も聞キ取リしり、ほととぎす、
してたうを、ほととぎす（京都）、つべん（關東）、ほととぎす、
か（仙臺）、其外、方言（支那）も、種々あり、支那（支那）も、不（支那）如（支那）帰（支那）去（支那）と云クふ

も、啼ナリ聲コエ鳥トリあり、時トキ鳥トリを、くつて鳥トリといふも、其（支那）雜（支那）の啼ナリ聲コエ鳥トリあり、固（支那）
よりハ、ハ（支那）聲コエ啼ナリくるれを、聞キく人の聞キ做（支那）子（支那）因（支那）りて、如何（支那）やうにも
聞キ取リらるる、

下學集、上（支那）鳥トリ形（支那）、杜（支那）鵲（支那）、別（支那）都（支那）頻（支那）宜（支那）壽（支那）、即（支那）杜（支那）鵲（支那）也（支那）、見（支那）十
王（支那）經（支那）、

「ほととぎす」と云ふも、啼ナリ聲コエ鳥トリを名ナとせしり、ほととぎす（支那）と聞キかて、後（支那）子（支那）て、
ほととぎす（支那）と聞キく、

出雲国（支那）全（支那）土（支那）記（支那）、島根郡（支那）、法吉郷（支那）の條（支那）、法吉鳥（支那）見（支那）也（支那）、鶯（支那）あり、
古今集、十九、誹諧、●藤原敏行（支那）、延喜元年卒（支那）、
いんぼくの田をつくれむか、時鳥（支那）、してのたをさ（支那）を、朝（支那）々（支那）呼（支那）ぶ、

右の歌も三の句、時鳥と云ひてあれど、してのたをさ」を呼ぶとて啼
聲あり、此歌、^ししたをさ」の中間の、^のを加へて造語して、(五音を
六音^りして、七音一句を^{べき}要も^{あり})「たをさ」の「た」を、田^子言寄せ
て詠みたらが、俳諧多^るなり。(田長の意をとえし)

然るも、此古今集の歌を^と因りて、田長と^{いふ}一語を^{立て}、(田長^{といふ}
成語を、何^もも見えぬや^{なり})本草^子、杜鵑啼けを、「田家候之興^三
農事^二」^とあり、意味を取り、田植時^に啼くが故^に、田長^子農
事を^勸むる^{なり}と^言ひて、勸農の鳥^といふ事を^附會し、
又、支那の蜀魂の傳説(蜀^帝死^為杜鵑)を加味して、して
を濁らして、死出の山を假想し、又、皆^{クク}價^テ鳥の事(蜀^帝死^魂杜

鵑、生前^に代^り見^したら^ば皆^の價^をは^たす^といふ^も埋^造す^かる^五里
而^移中^に迷^ひて、諸^原を^誣ふ^{もの}、痴^人の前^に、夢^を誣^くなり、

いへのかせ(家屋) 家の作法ナル意の家屋(ソの方) 字面を
つきて文字讀ジ 子したるあり、漢語の意義は字、唯
字をつきて訓讀ナを、文字讀ジとよ、支那の後漢の頃、賊の
白波谷とよ、地子起りしを、志らるみと讀み、盜賊の意とよ、
と、是れなり。

拾遺集ハ、雜上、菅原の大臣カネタケ冠し侍りける夜、母の詠み
侍りける。

夕方の月の桂も折るぞかり、ソのかせを、吹かせしが、

冠すも、元服するも、菅原道真公、貞觀元年、十五歳に
冠し、四年、試みおきて及第し、文章生とされり、及第するを、

天兒アマガキ（這兒ココ略シカク同ナリ）共トモ小兒コガキの傍ナリ置オケ茶チヤ被フキ物モノ此物コノモノ

初ハジメ大小オホコト二箇ニカ母子ボコの形カタ作シテ物モノの由ユ云ヘ這兒ココ見ミ母子ボコの音ネ便マシ元ノ

母子ボコ形カタ（人形ヒトガタの意イ）ト云此語コノコトバの畧シカク也ナリ

母子ボコ草クサの芽メ春ハルの七種ナナシユ用ヨウ此コノ時トキ御ミ形カタと云ヘ母子ボコの形カタ代カタ

又マタ人形ヒトガタの意イ也ナリ

平安朝ヘイアンの頃トキ天兒アマガキ比ヒ々々奈ナ（後世ノチノヨ）紙シ雜ジヤク如カキモ子コ物モノヲ供ツケ（云々）

母子ボコ形カタ又マタ這兒ココ見ミ（古書コノコトバ）昔ムカシより此コノ形カタ母子ボコ形カタ

三月三日ミチノカサ草クサ餅モチ供ツケ（此コノ餅モチ）母子ボコ餅モチ云ヘ其ソノ餅モチ

子製コシヨ衣イ草クサ餅モチ因ユ此コノ母子ボコ草クサの名ナのナ（此コノ餅モチ）

母子ボコ草クサ餅モチ製シヨ衣イ草クサ餅モチ後世ノチノヨ草クサ團ダン子コ之ノ別ワケ子コ之ノ葉ハ製シヨ

製シヨ衣イ草クサ餅モチ艾ア餅モチ又マタ草クサ餅モチ之ノ類ルイ三月三日ミチノカサの雜ジヤク茶チヤ用ヨウる

たり

小笠原傳書コガシハラデンショ（室町時代ムロマチノヨ）御ミ伽ガ這エ子コ目メ出デ度タク年ネン寄ヨリの方カタ

引ヒキ參マシ杖シヤウ杖シヤウ云ヘ天兒アマガキ用ヨウ此コノ時トキ這エ子コ略シカク以ヨリ方カタ引ヒキ是コノ天アメ

兒コの畧シカク也ナリ（俗説ソコトバ考カウあの部ブ）

雍州府志ユウシュフシ（天和土產門テンノツサンノカド）御ミ伽ガ這エ子コ此コノ偏人ヘンジン元造ゲンゾウ大小オホコト母子ボコ之ノ形カタ

江家次第エケサダヒ十七ナナ立タテ太子タチノミコ幼君コノミコ時トキ云ヘ御ミ三サン把バ（散飯サンパン）奉帳ホウチャウ中ナカ

阿末加津アモカヅ云ヘ其ソノ後ノチ供ツケ以ヨリ々々奈ナ

あむし(夏虫) 六種の別あり。

夏の時々の諸虫の泛稱。和名抄十九ノ下丁「夏蟲奈都無

之、莊子云、夏虫不可以語於冰、莊子云、秋水篇あり、

夏ナツコ蟻アリの事、仁徳紀、二十二年正月、那ナツ免ムス務ム始シの、臂ヒ務ム始シの衣、

二ニ里リ着キて、夏ナツ蟻アリの習ヒ蟻アリ蟻アリ三ニ天アマ原ハラ蟻アリの絹ヌ布フあり、

燈ヒトリ蟻アリの事、萬葉集、九ノ下丁、長歌、「夏ナツ蟻アリの火ヒ子コ入イるがどと、漆

入イる、船フネ潜カぐカ、ナツとく、古今集、其ナツ恋コイ一ナツ夏ナツ虫ムシの、身ミをシたづツらラまマを

をシたタとトも、ひとヒトの思オモひヒよヨ、ナツとくトクをシらラけケり、

虫ムシの事、古今集、十二恋、二、あむしを、何かいひむ、心ココロを、吾オレも

思オモひヒよ、燃ヒえぬべらラり、後撰集、其ナツ夏ナツ、はたハタをシとトうウて、云ク、汗アザ

あむし

衫ガの袖そでを包かみ、包かめ、隠かくれぬものゝ、あむむしの、身みよりあまれの思おもひをうけり。

蟬せみの事、後撰集、四夏、八重ヤチ律リツ繁はきき宿とどまらぬむしの聲こゑより外ほかに訪たづね人もなし。

蚊かの事、廿藻塩草、十二虫、「夏虫の聲、蚊也。」

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

そまれの事(磯馴松) 此語、多おほく字じ磯馴松と書かき習なへれど、「いそまれの約やくを、見て、磯邊いそべの松まつ限かぎる名なのやうに云いふ人ひとあれど、然しからば、此語このことば原もとは、物ものに「副たぐひある」の約やくを、風かぜも云いひて、山風やまかぜ、清風きよかぜも従したがひて、靡なく意いの語ことばなり。

詞花集、三秋、曾根好忠、「三吉野の、象山やまがし蔭かげに、立ち松、幾いく秋風あきかぜも、そまれの事ことぬらむ。」

源白物語、松屋、「見馴れそまれば、別わかるほどえ、た、あうざめを、千載集、十三恋、三、「そまれの木きの、そまれく、て、聲こゑを、若わか口の、

新續古今集、十六雜中、「屋上より、松の梢しやうも、そまれば、東あづまて、門田かどの稲いね葉は、風かぜそよぐなり。」

續後拾遺集七、物の名、柳俊賴、酒麻石の浦や、まぎさき子立
て、磯馴松、下枝シツエ、波の打たぬ日を、續古今集、十二、三、二、定
家、あだ波の、高師の濱の、磯馴松、馴れをわけて、我が悲ひめゆ。

(Faint handwritten text, mostly illegible due to fading)

はにかい(俳諧) 無名抄、俳諧を、戯言シレコト歌と訓めり、俳諧
優、諧ワカえ、諧ワカ詠ワカを、用ゐられた、共、戯シレコト言ワカ意ワカ有、然シテ子コ、古今集、
俳諧を、誄シ諧ワカと書きてある、因ユりて、誄シを、シした、義シなれど、
種タ子コ論ワカある、人ヒト、然シテれども、是コトれ、連ツ字ジ改カ偏ヘン三サン方ホウと云イひて、連
字ジ字ジ、釣ツ込コ、偏ヘンを、移シ動ドウある、可カ怜レ(神代紀)を
河カ怜レ(仁賢紀)とし、蝦夷シマの夷ヒの字ジ、虫ムシ偏ヘンを、添ソへ(皇極紀)感カン婦フ
(春情感)少シ女メの感カン、女メ偏ヘンを、加カへたり、(萬葉集、一、二、三、丁、支
那シナを、輻フク湊ソウを、輻フク輳ソウとし、播ハ紳シを、緝シ紳シ、爛ラン漫マンを、爛ラン熒エイを
る、是コトれ、俳ハ諧ハを、誄シ諧ワカと書カけり、是コトれ、
鳥トリ呼コ、嗚ウ呼コ、摸モ糊コ、糲ロ糊コ、又マ、漫マン能ネを、能ネ能ネ、淋リン病ビョウを、痲マ病ビョウ

まど書くも同じ。

或、支那の隋書に「侯白、字君素、不持威儀、好為詖諧雜說」とあるを、古今集あるを、誤りあるを云ふ者あり。此隋書あるが、昂ち、連字改偏旁あり。

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

三木三鳥、往時、古今傳授と、古今集中のをかたまの木、めどにけつ花、かはふ草、(三木)木、呼子鳥、稲負鳥、百千鳥、(三鳥)の秘草と、難解の語として、諸説紛々、今、左に解釋せむ、をかたまの木、

古今集、十物の名、をかたまのま、紀友則

三吉野の吉野の瀨に、泡をかたまのま、と見ゆらむ、

泡をか、と、イソガ、イソガ、用ゐるを、假名遣の、を、あるを知る、

招玉サカキの木の轉カキ、サカキ、木カキの異名あり、

「まど」の「か」よ通じたる、神代紀上の二十二丁、ヒメキキヨロ、濁心、景行紀

四年二月、穢陋カキナシ私記シ、加太奈之、靈異記、下の廿二
陋、加多奈私、欽明紀、二年三月、堅塩カキシホ、此云岐拖志、カキシホ

招玉ヲキタマの木キ云故コト、神代カミヤマト、天照大神の天岩戸アマノイハに隠りたまひ
し時トキ、招ヲキき奉らむためメ、勾玉マカサメ、鏡カガミ、劔ツルギを懸けたる賢木トモキを用ひ
しコト因ユふ、(古事記上三十五丁)其事コト、後ノチ、天孫アマノミコの天降アメノリりまを時
み、天児屋根命アメノコノネノミコト、副賜ソボメ其遠岐トホキ之八尺勾瓊ヤササカノマカサメとあり、(古事記
上の五十九丁)「其」とあり、招ヲキしとあるは、岩戸イハ隠カケの時トキ、招ヲキき奉
るコト用ひし勾玉マカサメあるコトを知シる。

招玉ヲキタマと云語コト、鷹トビ鳥トリ子コ招ヲキ舞マヒと云ふ語コト、同類ドウレイの熟語ジュクゴあり、

をとり(囀)も、招鳥ヲキトリの畧リョウあり、

詞林採要抄シリンサイヤウシャウ、日本紀ニッポンキ竟宴キマヒの歌、玉タマがしは、をかたまの木
の鏡葉カガミハ子コ、神カミの胎マコ供イタダキへツかき、玉タマがしは、玉タマを
けたる賢木トモキと、それノ、鏡カガミをシかけたレ、鏡葉カガミハとシつけたるコト
と、伴信友トモノリトモ大人オホタチ、解トクかれたり、かしはカシハとシ、食物シヨクモノをシ載ノせり用ヨひ
木キの葉ハの稱ナリ、堅カタし葉ハをシめたる語コト、常葉木トコノハノキの葉ハのシり
く堅カタきをシ用ヨひが故ユ、仁徳紀ニトクキ十二丁、葉ハ、此云箇始コノハノキ、

古今榮雅抄コノミヤカサ(飛鳥井雅親トビノイミヤノサネ卿キミ作シ)、をかたまの木カクタマノキ、木キ偏ヒナ子コ靈レイ巫ウ
の字ジを用ヨひたり、靈巫木レイウキの合字カヒジあり、
以上、以古婆衣イコハエ十トの説セ、諸書シヨショを参取サンソクし、鄙考ヒノカウをもかへたり、

神名秘書、^{オキダテ}興玉神、五十鈴河上地主也。伴神、無寶殿、以寶木為神殿也。をとおの違ひえ、當田字ありき。

謡曲、弓八幡、^{ヒモロギ}神離のをかたまの木の枝よ、世更金の鈴を結びつけて、千早振る神遊び云々、太玉串をいづるあるべし。此謡曲、足利義持の頃、觀世世阿彌の作なり。何か據る所ありしあるべし。

めとよけつり花

古事集七、物の名、めとよけつり花させりけるを詠あせたまひける。又屋康秀

花の木よ、あらざらめとよ、咲きよけ、そにし木の實、成る時よが、

馬道削花挿けり

舊説、多岐著者と考へたり。解せられざりしなり。

馬道又、音便便よ、めだうと云ふが並通と、約めん、めとよと云ひき。馬道と云、殿中よ、細長く土間として置く所なり。事のある時、之宮中の奥まで、馬を牽牛入れ、乘御の用とよと云ふ。常子、横子、厚き板を並べわたして、通路とよと云ひしなり。

為隆記、大饗の菓、西中門北廊、西戸八帖、設諸大夫座、同廊馬途、北遣戸八帖、設尊者前驅座、(比古渡衣十九)

合類抄、甲集(元禄)三、神祇門、削花、初春十五日、以楊

柳枝為之、挿門戸及馬道、是れ也、正月十五日の削掛
の事、それと元祿の書に、馬道の説、見えたれを引けり、
類聚名物考、(安永)宮室、一、馬道、めだう、めんだう、めど、
云々、古今集、みめど、つりばふせると云ふ、此事を云ひ、
けづり花と云、木を削りかて、花の形を作りたるもの、毎年十二月(生
花みき頃)御佛名と云、官中にて修せられ佛事に用ひたるもの
なり、其翌日、此花を献ず、それを馬道とて挿して、とてあそ
むれしなり、

延喜式、御佛名、菊削花、二枚、ちと見ゆ、
新古今集、十六、雜上、佛名あした、けづり花を御覽じて、

朱雀院御製表

時過ぎて、霜を枯れし、世化あれど、今日も昔の心、ちとぞあれ、
朝忠集題詞、朱雀院の帝、院よりたまひて、御佛名
のあした、けづり花をさして、御あそびのをりよ、云々、
かはるごとく、

古今集、十、物の名、かはるごとく、清原深養父

うはたま、夢子なにかはるごとくまむ、うつまたま、あかぬ心を、
今の「かはあをのり」もくしと云ふ、

鎮火祭祝詞、水神みづかみ、川菜かみ、云々、
和名抄、十七の九丁、水草類、水草、加波奈、一云、河苔、草生水

中綠色也

よぶさいどり(呼子鳥)

古今集、一春上、題知らず、讀人しらす、

をちよちのたづね知らぬ、山中におぼつかなくも、呼子鳥かか、

霍公鳥ホトトギスの異名あり、

菅原せんげんの昔集後せいふ「かつたう鳥」なりとせしが多し、其外、

種々の説あり、甚しきと、下野集、鳥形門に、「日本呼王孫曰

喚子鳥」とあり、王孫と云、猿のたとひなり、

伴信友大人の其著、比古婆衣の五子、萬葉集、呼子鳥を

詠めり歌よ、何れも、郭公と同じ趣、聞史とて、字鏡集(寛元)

子「杜鵑、ヨビコドリ」とあるを證とせられて、奈良の京の頃、大和

國まで、郭公の異名を云ひし語あるを、京の山城國に遷りし

後、忘れられたるものありと云えられたり、實に、明断なりといふべ

し、後の人古今集の歌の春の節に入れたる人、今、春のものと

思ひて、解せられずありしなり、然れども、氣候早き年、郭公の季

春より、啼きをめしたるものありと見えて、萬葉集、三月一日の

喚子鳥喚子鳥の詠あり、されど、古今集、春の節に入水てあるは、郭公の心

ありしと認むべき理由あり、郭公あるを忘れたるは、其後

の事と見えぬ、

萬葉集、八の十九丁、

世の常は聞くは苦しき、喚子鳥、聲あつたき、時たまありぬ。

右、天平四年、三月一日、佐保宅作。

右の歌、定時より早く啼きそめしを詠みし趣、子解せらる。

呼子と云ふ語原を、晝夜、聲かぎりて飛ぶ啼人き友を求めて

呼び慕ふ心は聞取りて、趣味あるより名づけたるものありしが、子とて、

鶴トビ子鳥、まじく鳥をとりて、鳥子のつら接尾語と思へる。

萬葉集、二の十四丁、「いにしへは、恋ふるも鳥を、霍公鳥、蓋し

や啼きし、吾が恋めりごと。

同、二の三十二丁、「宿トビ見鳥、同、一の八丁、「怒トビ要子鳥、

同集、さて、呼児、喚児、喚子、喚孤を、のみありて、真名書き

あらえ、見えぬやうなれど、何れも、よびはと訓みたまふちあり、

前子といふ字鏡集、さて、「ヨビコドリ」とあり、されど、古今集

遠鏡、よぶとあり、和名抄、興不古止里とあり、音

通、然言へた、いかゞあるべき、

萬葉集中の呼子鳥の歌を讀む、其趣、郭公子のたがな

ホ、雨天子、飛び啼くありさまなど、貴子、然り、其趣の似た詠、

四首を右に舉ぐ、

萬葉集、十の十九丁以下、霍公鳥の詠二十餘首を列其

したる中は、はさまりてあるもの、

朝雪段、八重山越えて、喚孤鳥、今や汝が来り、宿もあらまに、

朝霧の八重山越えて、雀公鳥、郊の花鳥邊から鳴きて越え来ぬ。
同集、十の七丁及び二十二丁子。

朝霧の志ぬき濡れて、喚子鳥、三船の山也、鳴きわたる見也。
聞きんせと、君が問えせと、雀公鳥、志ぬき濡れて、後此鳴きわたる。
いそおほせとり、(稲負鳥)

古今集、四秋上、題知らず、讀人知らず。

我が門ふ、稲おほせ鳥の、鳴くを、今朝吹く風子、雁を来さけり。

假名遣え、和名抄、十の十五下、「稲負鳥、以奈於保世度里」

黄鶺鴒ヒメヒメの古名も、諸系、稲刈を課オホす(催供)意あり。

八雲御抄(順德天皇御作)三の下、「いそおほせ鳥、彼鳥の鳴く」

時人の家々子、稲といふ物を、負て入るあり。

於保須といふ事詞(下二段活用)負オホと課オホすとの二義あり。

いそおほせせると、孝徳紀、大化元年八月、以輕重オホ科課オホ、新

撰字鏡、九丁子、「徴、求於保須、以呂波字類抄子、課オホ、オホス、

と、徴課オホの意オホと、徴オホ、促オホすの意オホを用ゐらるあり。

黄鶺鴒と、秋の末、稲の熟せし頃、晝夜、大空を飛鳴きわ

たり、田面子群がり来り、農民、水子促され、稲を刈取りあり。

和泉式部集

金ふたを、いそおほせ鳥の、教へを、人を恋路子、惑えながら、

此歌を、神代、諸冊の二尊、鶺鴒の首尾を、揺くを見て、夢む

文道を得たまひし事(神代紀上の七丁)子據を詠みあり。

和名抄十の十六丁「鶴鴿」果紀私記曰止豆木乎之間止里。

綺語抄下「いさおほせ鳥」或人云、度たきまるとぞ。

後「古今榮雅抄(文明)」「稲負鳥」庭たきまると、黃鶴鴿あり。

前「下学集」「鶴鴿」所謂稲負鳥云者歟。

平兼盛集、九月田刈所子羽あり。

辛くして、いそぎ刈りつ、山田かま、いそぎせとの、うしろめたさま。

足引の山田守るまふ(騾子)あぢまんと、いそおほせ鳥を、逐ふも

手たせし、

初の歌のうしろめたし、後が痛しの義、後の氣づかほし、意、うしろやましの

反り、鶴鴿の稲刈を課もが、心がりるれを、急ぎ刈り終へ
たりの心まり。

源仲正集

騾の女が、いそほ(稲穂子)を、連初初子、打ちはへて采ふ、庭

た、まかふ、

も、ちどり、(百千鳥)

古今集一、春上、題しらす、讀人しらす、

も、ちどり、囀る春え、物毎、あまたまふ、我ぞちりや、

百千の鳥の義を、群小鳥の意を、

萬葉集、十の二十七丁

Vertical columns of faint, illegible text within a blue-lined border.

大觀文庫藏

